

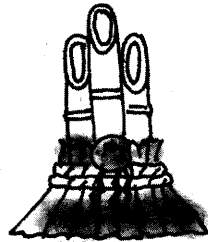
特集

子どもと新年 昔遊びを楽しむお正月

新年を迎える準備

私が以前勤務していた公立保育園では、クリスマスツリーを片づけると同時に、お正月を迎えるための大掃除が行われます。二歳児クラスは、タオルを小さく切ったぞうきんを使って保育士と一緒にロッカー、玩具を拭き、大掃除ごっことして楽しみながら保育室のお掃除に参加します。五歳児クラスでは、大掃除の意味も理解できて意気揚々と始めます。

私市和子



「あ！ 汚れている」と保育室の壁の上の方を指さし、棚の上を上ろうとする子もいて「そこは先生がやるから」と話すと、「自分たちの部屋だから自分でやる」と言います。年末の大掃除なので子どもたちの気持ちを受けとめ、担当が付いて壁の掃除もしました。子どもたちは「きれいな部屋になったね」「これでお正月を迎えられるね」と自分たちの保育室に満足した表情を見せていました。

十二月二十八日は、街に師走の様子を見に行くの

が年長児の恒例です。街を吹き抜ける風は冷たく、クリスマス華やかさはなくなり、師走の忙しさが伝わってきます。商店の大掃除を見たり、歳末大売出しの看板を見つけたりして「なんて書いているの？」と聞くので、「お正月がくるから洋服安く売りますって」と答えると、うれしそうに「お母さんに教えてあげよう」と友達顔をのぞきこんで言っていました。

ここ数年、大きな門松が見られなくなつたと思いつながら花屋の店先まで来ると「あ！お正月があつたよ」と子どもたちが見つけたのは松やセンリヨウでした。

道路には、しめ飾りの露店が出てお店の人が手際よく、しめ縄で昆布・えび・橙を飾る姿に子どもたちは目を見張り、「あれは何？」「喜ぶで、昆布を飾るのよ」「へえー」保育士とのやりとりに、お店の人にも思わず笑みがこぼれていました。

新年を迎えて

新年を家族とゆつくり過ごして、一月四日から保育園は始まります。新年を迎えた保育室には、日本の伝統的な玩具（こま、けん玉、羽根つき、カルタ、すごろく）が子どもたちを待っています。

五歳児のA君は、夕方の迎え時間になると落ち着かず乱暴な行動、言動が見られていました。降園時間遅いA君は、ほかの子のお迎えが気になるのでしよう。A君がどうしたらこの時間帯に遊び込めるのか、私たち保育士は悩んでいました。しかし、お正月明けは違いました。四歳のときからこま回しができるので、こまの登場に喜び、夕方も友達とどちらが長く回っているかで勝負していました。

「先生！勝負しよう」と言い、手をなめ、こまのひもを巻くA君。私も手加減せず回すと、A君のこまが先に止まりました。その瞬間、私のこまを足で

止め「へへ……」と笑います。何を言われるのか
なという表情のA君に「もう一回勝負しようか」と
声をかけ、今度はA君の勝ちでした。誇らしげにこ
まを見ているA君に「A君の勝ちだね。でもさつき
は先生悲しかったよ」と話すと、「うん、もうしな
いよ」と自分でやった行動が、わかっているという
穏やかな声でした。乱暴な行動が多かったA君が夢
中でこまを回し、友達にひもの巻き方を教える姿を
見て、保護者の方が声をかけてくださいました。

こま回し遊びは、五歳児みんなが夢中で、その姿
を見て、四歳、三歳児がやってみたくてチャレンジ
する子どもたちがいて、縦の関係が生まれます。上
手にできる五歳児にカッコイイ！と憧れ、五歳児
はさらによいところを見せようと技を磨きます。

登園、降園時にこま、羽根つきで遊ぶ子どもたち
の姿に昔を思い出されるのか一緒に遊び、アドバイ
スしてくれる保護者の方、祖父母の方もいました。

自分の子どもだけでなくほかの子どもの成長にも気
づき、励ましてくださることが、子どもたちに自信
をもたせ、育つ力を与えてくれるのだと思います。

異年齢児のカルタ遊び

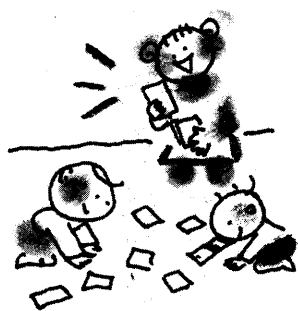
また、異年齢児が自然に交じりあって遊ぶ姿が見
られるものに、カルタ遊びがあります。

一歳・二歳児のカルタは、保育士特製の大きな絵
札のみのカルタです。読み手は絵を見て創作文を読
み上げます。二歳児は真剣そのもので、取れたとき
はとても喜びます。朝、夕の異年齢交流保育時間で
は、四歳、五歳児が読み手役になり、言葉を考えて
読みあげます。

「リ」、りんごは赤くておいしいよ
「あ」、アイスクリームたべたいな

なかなか、絵札が取れないでいる二歳児には、四歳・五歳児が、「ほら、あそこだよ」と優しく教えてくれます。一歳児も知っている絵札をたたいて、その絵札を五歳児に渡され、うれしそうに抱きかかえます。抱きかかえ、その場からいなくなる子や、勝手に好きな乗り物の絵札を持って行ってしまいう子もいますが、「だめだよ」と言いながらも「まあ、いか」と一歳児には寛容な子どもたちです。

幼児の部屋では三歳・四歳児が取り、字の読める



五歳児が読み手になり、小さい子にルールも教えています。「Aちゃんが先だったよ」、何人もの手が出ると「ジャンケンしてね」、その場を仕切っている姿が羨ましいのでしよう。五歳児がいなくなると四歳児が三歳児相手にうれしそうに読み手になります。でも知っている字だけ読むので、三歳児は保育士の顔を見上げ困った表情で助けを求めてきます。ただどしいけれど一生懸命読んでいるのがわかり、拒否することができないのでしよう。遊びの中で相手の気持ちをくみとることが社会性を育てるのではないかと思えます。

異年齢で遊ぶことの多い保育園ですが、お正月の遊びは、ルールがわかりやすく、みんなで楽しめて縦のつながりを感じます。大人から子どもたちにも、また大きな子から小さな子どもへと伝わるこの日本の伝承遊びを大事にしていきたいと思えます。

(お茶の水女子大学 いずみナーサーリー)